



窮理の部屋134

玉虫厨子

昨年秋に開催した企画展「色の彩えんす」で人気が高かった展示に、「生物の構造色」があります。モルフォチョウやタマムシなど色鮮やかな生き物の標本などを展示したのですが、これらの共通しているのが構造色というちょっと特殊な色の見え方だったのです。構造色は、CDの表面が虹色に光って見えるのと同じように、光の波長程度で並ぶ規則正しい構造によって色が見える現象です。構造色の特徴として、色鮮やかで、光源の位置や見る角度によって色が少し変化します。あまりいい表現では使われませんが、「玉虫色」という言葉はこのような構造色の特徴を言い表わしていますね。

そんなタマムシの美しい構造色を利用したものに、法隆寺の「玉虫厨子(たまむしのずし)」があります。厨子というのは仏像や経典を収める入れ物で、玉虫厨子は国宝に指定されています。

玉虫厨子は法隆寺の大宝蔵院という建物に安置されており、いつでも見ることができます。あちこちに透かし彫りの金具が取り付けられており、その金具の下にタマムシの羽が挟んであって、独特の輝きをはなっている…はずなのですが、残念ながら剥落してしまったのか、タマムシの羽があるのかどうかすらほとんどわかりません。懐中電灯で光をあててみると、左側面の上の方に1ヶ所と、右側面上部の扉の右下の蝶番の部分の計2ヶ所だけ、タマムシの羽が残っているのが確認できました。懐中電灯の光をあてると今でもきれいに緑色に輝いて見えるのですが、部屋の照明だけではほとんどわかりません。見に行ってみようという方は、懐中電灯をお忘れなく。なお、大宝蔵院の入り口に「宝物保護のために照明の調整を致しております。懐中電灯のご使用には充分ご配慮下さい。」と表記されていましたので、過度に使用しないようにしましょう。

それでは、本来、玉虫厨子はどのような輝きをはなっていたのでしょうか？実は法隆寺には、この玉虫厨子を復元したのものもあるのです。岐阜県で造園業を営んでいた中田金太氏が費用を出して玉虫厨子が2基製作され、内1基が法隆寺に寄贈されています。これは法隆寺の大宝蔵殿(名前は似ていますが、国宝の玉虫厨子が安置されている大宝蔵院とは別の建物)で展示されています。但し、この大宝蔵殿は、毎年春と秋に開催される法隆寺秘宝展に使われる建物で、この秘宝展の期間中でないと見ることはできません。

ところが、玉虫厨子の復元品を見ることができる場所が大阪市内にもあるのです。地下鉄日本橋駅から南へ、でんでんタウンの手前に高島屋東別館という建物があります。この中にある高島屋史料館に玉虫厨子を復元したものが展示されているのです。この復元品は、高島屋大阪店で1960年に開催された昆虫科学



玉虫厨子の復元品(左)と
タマムシの羽の部分(右上)
(高島屋史料館)



展覧会で展示されたものなのですが、元々戦前に奈良の漆芸家北村大通らによって製作されたものだそうです。ところが肝心のタマムシの羽がついていなかったため、全国の小中学生に呼びかけて集まったタマムシの羽を使って完成させ、昆虫科学展覧会で展示されたのです。まだ完成してから50年余りということもありますが、タマムシの羽の美しい輝きを、間近で見ることができます。

なお、法隆寺の国宝玉虫厨子、玉虫厨子の復元品、高島屋史料館の玉虫厨子の復元品のいずれも、写真撮影不可ですのでご了承ください。 長谷川 能三(科学館学芸員)

法隆寺

拝観時間：8時～17時(2/22～11/3)、8時～16時30分(11/4～2/21) ※無休

拝観料：一般1000円、小学生500円

アクセス：JR大和路線「法隆寺駅」南口から法隆寺門前行きバスで約7分、
または北口から北へ徒歩約20分

法隆寺秘宝展

期間：3月20日～6月30日、9月11日～11月30日(毎年春と秋に開催)

時間：9時～16時30分(入場は16時まで)

場所：法隆寺大宝蔵殿(玉虫厨子の復元品は、大宝蔵殿南倉に展示)

料金：大人500円、小学生250円

高島屋史料館

開館時間：10時～18時

休館日：毎週日曜日・水曜日、年末・年始、

展示入替期間(2014年8月20日～24日など)

入場料：無料

アクセス：南海電鉄・地下鉄御堂筋線「なんば駅」より東へ徒歩約10分
近鉄奈良線・地下鉄堺筋線「日本橋駅」より南へ徒歩約8分